

# 藤野巖九郎と魯迅をめぐる

## ——「惜別」：その前後——

徳永重良

はじめに

1. 魯迅の日本留学と「藤野先生」
2. 医学から文学へ：惜別
3. 「クレイグ先生」と「藤野先生」の比較
4. 魯迅の死去と晩年の藤野巖九郎

はじめに

過日、<sup>あわら</sup>芦原・湯の町駅（えちぜん鉄道・福井駅から北に約 20 km）にある藤野巖九郎記念館を訪れた。記念館は、駅前に広がる「あわら温泉湯の町広場」の一角にある。この建物は、もともと藤野巖九郎先生が、昭和 8（1933）年から逝去された 1945 年 8 月まで 12 年間、夫人とともに住んでいた自宅であり、福井県三国町にあった（最初に開業した医院は、生家の同県本庄村<sup>ほんじょうむらしもぼん</sup>下番にあったが、1948 年の地震で全壊）。この自宅が遺族によって町に寄贈され、芦原温泉開湯百周年を契機に藤野巖九郎記念館として開館（昭和 59 年）。さらに平成 23 年に、今の広場に移された。木造の簡素な建物だが、レトロな懐かしさと風格とを感じさせる。

魯迅直筆の「藤野先生」の原稿、藤野先生が丹念に朱を入れ、添削した周樹人（魯迅 [Lu Xun] の本名）のノート、別れに際し、裏に「惜別」と書き、サインして周にわたした藤野先生の写真を見て、いささか胸の熱くなるのを覚えた。

藤野と魯迅の師弟関係については、魯迅が「藤野先生」で<sup>1)</sup>、そして太宰治が『惜別』<sup>2)</sup>で描いているので、よく知られている。だが、藤野先生は、惜別後数年にして、なぜ仙台医学専門学校（以下、仙台医専と略称。正確には、後述のように東北帝国大学医専）を辞めたのか。その後郷里で開業医としてどのように暮らし、生涯を終えたのか。当時、周ら多数の清国留学生は、なぜ欧米先進国ではなく、日本を留学先に選んだのか——などの事情については、それほどよく知られてはいないだろう。

小論は、これまで種々の配慮のためか、とかく曖昧ないし誤解されてきた、藤野が東北帝国大学を辞めるに至った事情、その理由を明確にし、それと関連して、清国留学生の事情、藤野・魯迅と

の師弟関係、帰郷後における医師としての藤野の生活状態等——の一端を、明らかにしようとするものである。付論として、魯迅の「藤野先生」とよく対比される夏目漱石の小品「クレイグ先生」とをごく簡単に比較・検討することにしたい。

## 1. 魯迅の日本留学と「藤野先生」

問題の検討に入るまえに、これまでの経緯について概略を述べておいた方が便利であろう。上記二つの名作をすでに読んでいる方は、この部分を適宜スキップされたい。以下は、筆者なりのその要約と若干の注釈である。

周樹人（魯迅の本名）は、南京の鉱務鉄道学堂を1902（明治35）年1月に優秀な成績で卒業し、清国の官費留学生に選ばれた。こうして若きエリート周は同年4月に来日した。偶然のことだが、翌1903年には、夏目漱石が二年間のイギリス留学をおえて帰国している。二人の関わりについては、のちにより詳しく触れるであろう。

周は、一族が紹興——紹興酒の産地として有名——に移り住んでから彼で十四代目という名家の出であった。1881年の生まれだから、来日した時には21歳であった。ちなみに3歳下には、弟の周作人がおり、彼もやがて来日し、兄とともに著述活動にたずさわった。周一家は、およそ千坪もある敷地内に、いくつかの家族や使用人、さらに小作人も住むという大家族制であった。しかし祖父（地主で、高級官僚）が、息子（つまり魯迅の父）の科挙についての贈賄嫌疑で下獄し、父も病弱で比較的若くして亡くなった。そのころから、周一家の家産は傾き始めた<sup>3)</sup>。

東京で周はまず弘文学院に入学し、2年間在学。日本語や基礎科目などを学んだ。この学院は、かの講道館の創始者であり、高等師範校長としても著名だった嘉納治五郎が、西園寺公望外相兼文相に依頼され、中国人留学生のための学校として創設した。当時、早稲田大、法政大などにも中国人留学生のための速成科が設けられており、日本への留学はそれほどブームだったのである<sup>4)</sup>。

留学生の受け入れについては、日清双方にプロモーターがいた。日本側は、元駐清外交官で文筆家の矢野文雄（龍溪）、清国側は開明派の官僚・張之洞<sup>チョウシンドウ</sup>であった<sup>5)</sup>。将来の知日派の育成、中国近代化のための人材養成、欧米への留学に比べ費用が安く、言葉の習得が容易なこと（とくに大勢派遣するには費用の安いことが重要）など様々な思惑や要因が重なって、日清両政府間に留学生の派遣に関する合意が成立した（1899年）。

大国清が新興の小国日本になぜかくも敢なく敗れたのか。日清戦争（1894-95）の敗北は、中国にとって「阿片戦争以来の最大のショック」であった。日本にあり、清に欠けているものは何か。敗北後、両国間の社会発展の格差はより拡大しつつあった。これらが、中国の知識人層、一部の支配層の間で抱かれたほぼ共通の危機意識であり、彼らの間でたえず議論された問題だった。そして、旧守派の反動に対抗しつつ、どのように改革を進めるのかが、とくに若い知識階級に課せられた課題であった。日本は明治維新以降近代化に成功し、彼らにとって身近なモデルの一つとみなされたのである<sup>6)</sup>。

当初わずか13人から始まった清国留学生は、03年に1300人、06年のピーク時には12,000人に

達した<sup>7)</sup>。この間、隋・唐の時代から千年以上にわたって実施されてきた「科挙」がついに廃止された（1905年）。科挙は形骸化し、もはや時代の要請にあわない遺物と化していた。日本への留学は、新しい知識層の一つの形成ルートであり、その意味で科挙に代わる新機能を果たすものであった。事実、後で見るように、日本留学組の中から、新しいインテリゲンチヤが形成され、様々な分野で指導的役割を担うことになる。ただ06年ころを境に日本への官費留学生は徐々に減少した。辛亥革命（1911年）に伴う政治的・財政的混乱とともにブームはしぼんだ。以後は通常の形での私費留学が両大戦間まで存続したが。

周樹人は弘文学院に二年間在学し、卒業した。この頃「日本はあたかも清朝に対する革命運動・改良運動の楽屋」<sup>8)</sup>であった。孫文、黄興、章炳麟（「中国革命同盟会」設立者たち）らの革命派の政治的指導者たちが当時、頻繁に来日して、清朝打倒の機会を窺っていた。日本側にもこれら亡命者を庇護・支援する人たちがいた。たとえば宮崎滔天（虎蔵）。彼は当時としてはめずらしく国際的な連帯意識をもった運動家であった<sup>9)</sup>。孫文を犬養毅に引き合わせるなど、外交の影の斡旋役をも務めた。清朝は、1912年についに崩壊、南京で中華民国が成立し、孫文が臨時大統領に就任した。

また、次世代の新しいリーダーたちも日本で育ちつつあった。たとえば代表的人物として陳独秀<sup>チェントウシュウ</sup>を挙げうる。彼は弘文学院で週の1学年上だったが、帰国後、独力で雑誌『新青年』を創刊した。はじめ主に啓蒙主義的であった同誌は、のちマルクス主義の影響を受けるようになる。また「新文化運動」を提唱し、五・四運動にさいして社会的に大きな影響力をもった<sup>10)</sup>。魯迅も最初の短編「狂人日記」を同誌に発表し（1918年）、以来しばしば寄稿している<sup>11)</sup>。陳は中国共産党の創立（1921年）に参加、総書記となる。のち彼は、胡適（アメリカ留学組）、周作人らとともに北京大学に教授として迎えられた。要するに、日本は、この時期、清朝打倒を目指す政治家たちの亡命先であり、また西欧的な科学や文化を習得しようとする新しい知識階級の形成、媒介、陶冶の場であったのである。

留学生のあいだでも様々な運動があった。ここでは光復会と魯迅との関係だけについて触れておこう。光復会とは、主に浙江省出身者によって組織されていた革命運動の団体である。他地方の団体と統合し、のちに先にも少し触れた中国革命同盟へと発展してゆく。魯迅は、光復会の東京支部結成（1903年）の段階からこれに参画し、正式結成（05年）以降も同会の会員であったと指摘されている<sup>12)</sup>。

いまひとつ重要な事件として清国留学生のストライキがあった。1905年11月、文部省は「清国人ヲ入学セシムル公私学校ニ関スル規程」を公布した。これは、急進化する留学生の動きを危惧した清国政府の要請を受けて、文部省が公布したものである。住居を寄宿舎や監督の行き届いた下宿に限るなど留学生の行動をより規制しようとするものであった。これに反発して留学生たちがストライキを行う。当局および清国公使館はその撤回を拒否。留学生たちの意見は、激論のすえ、《即刻帰国派》と《留学継続派》に二分された。当時、周樹人はすでに仙台に行っていたが、同郷の友人の許寿裳（彼は《継続派》のいわば事務局長。帰国後やがて北京大学教授となる）を通じて状況について熟知していた。周は、事態を冷静に捉え、《留学継続派》の立場をとった。結局、おおよ

そ二千人が抗議のため帰国した。他方、《継続派》の間では、その後復校を主張する者が増え、ストは翌年1月末までに収拾された<sup>13)</sup>。だが、こうした一連の抗争はその後の清国留学生低減の一因となったと思われる。

ところで周樹人は、このストライキの半年ほど前に仙台へ立ったのであるが、それ以前には、前に述べたように弘文学院に在学した。彼にとって当時の東京や同胞たちはどのように映ったのだろうか。彼は「藤野先生」の冒頭を、つぎのように始める。

「東京も格別のことはなかった。上野の桜が満開のころは、眺めはいかにも紅の薄雲のようではあったが、花の下には、きまって、隊を組んだ「清国留学生」の速成組がいた。頭のとっぺんに辮髪をぐるぐる巻きにし、そのため学生帽が高くそびえて、富士山の格好をしている。…／中国留学生会館も…[たまには]立寄ってみる価値はあった。…だが、夕方になると、一間の床板がきまってトントンと地響きを立て、それに部屋じゅう煙やらほこりやらで濛々となった。消息通にきいてみると「あれは踊りの稽古さ」ということであった。／ほかの土地へ行ってみたら、どうだろう。／そこで、私は、仙台の医学専門学校へ行くことにした。…」(魯迅、「藤野先生」、以下、この作品からの引用は、このように表記する)

辮髪は、清民族の習慣であって、漢民族のものではない。周樹人は来日の翌年、辮髪を切った。それはたんに因習を断つというだけでなく、清朝打倒の意思をも含意するものだった。彼にとって、東京でもいまだに辮髪を結び、集団で行動する同胞を見るのは、不快だったに違いない。同胞の一人もいない仙台医専を選んだ一つの理由は、そのためであろう。

仙台は当時人口10万人、全国で11番目の中都市だった。東京から列車でおおよそ12時間。彼は、入学試験と授業料とを免除され、同校で、最初でただ一人の留学生となった。そして解剖学を担当する藤野巖九郎教授ふじのげんくろうの講義に出席するが、これは忘れがたい出会いとなった。周、つまり魯迅(周のペンネーム)はのちに「藤野先生」(約20年以上も後の1926年に書かれた)で、彼のことをこう描いている。—

「そのとき、入って来たのは、色の黒い、痩せた先生であった。八字ひげを生やし、眼鏡をかけ、大小とりどりの書物をひと抱えていた。その書物を講壇の上へ置くなり、ゆるい、ぼそぼそとした口調で、学生に向かって自己紹介をはじめた。

「私は藤野巖九郎というものでして…… うしろの方で、数人、どっと笑うものがあった。つづいて彼は、解剖学の日本における発達の歴史を講義し始めた。…うしろの方において笑った連中は、前学年に落第して、原級に残った学生であった。…彼らによると、この藤野先生は、服の着方が無頓着である。時にはネクタイすら忘れ、……一度など汽車のなかで、車掌がてっきり拘摸と勘違いして、車内の旅客に用心をうながしたこともある。…」(「藤野先生」)

学生たちは彼のことを「ごんさん」という愛称でよんでいた。藤野は名前のとおり点が辛いので

有名だった<sup>14)</sup>。その後、周は藤野先生に呼び出され、彼の研究室を訪れた。

藤野は、周に自分の講義が筆記できるか、と尋ねた。少しできると答えると、「持ってきて見せなさい」という。周はノートを彼に差し出した。数日後、藤野はノートを返しながらか、これからは毎週もってきて見せるようにと言った。

「持ち帰って開いてみたとき、私はびっくりした。そして同時に、ある種の不安と感激とに襲われた。私のノートは、はじめから終わりまで、全部朱筆で添削してあった。多くの抜けた箇所が書き加えてあるばかりでなく、文法の誤りまで、一々訂正してあるのだ。かくて、それは、彼の担任の学課、骨学、血管学、神経学が終わるまで、ずっとつづけられた。」（「藤野先生」）

夏休みに、周は東京に遊びに行った。帰ってみると、試験の結果が発表になった。「中ぐらいの成績で」合格していた。だが、それは「藤野先生が周にあらかじめ問題を洩らしたからだ」という主旨の匿名の手紙が周のもとに届く。それは全く中傷にすぎなかった。が、他方、学生の間には、そのように見ている者もいるのかと思い、周は自省とともに中国人蔑視の風潮を敏感に感じとり、つぎのように書いている。

「中国は弱国である。従って中国人は当然、低能児である。点数が六十点以上あるのは自分の力ではない。彼らが、こう疑ったのは、無理なかつたかもしれない。」（「藤野先生」）

周は日本人が意識的、無意識的にいんでいる中国人に対する蔑視、差別感を敏感に感じるが、同時に中国人としての誇りを失ってはいない。彼は、自国の遅れを自覚しながら、その遅れをいかに改革すべきか、——後から出発した国の知識層に共通の問題——がつねに彼の念頭にあったに違いない。ところで、彼は匿名の手紙の一件を藤野先生に報告し、親しい友人たちにも打ち明けた。彼らもむろん卑劣な手紙にとともに憤慨し、真相の究明に努めたが、結局は分からずじまいに終わった。

ノートの添削について次のようなエピソードもある。周が写した器官図について、先生はおだやかにこう注意している。—

「ほら、君はこの血管の位置を少し変えたね—むろん、こうすれば比較的形がよくなるのは事実だ。だが、解剖図は美術ではない。実物がどうであるかということは、われわれが勝手に変えてはならんのだ。…今後、君は黒板に書いてある通りに書きたまえ。

だが私は、内心不満であった。…心のなかではこう思った。／「図はやはり僕の方がうまく書けています。実際の状態なら、むろん、頭のなかに記憶していますよ。」（同）

これは、事実をありのままに受け止め、正確に捉えることを当然とする藤野の、——より誇張し



ていえば日本人の——性向（客観性の尊重、極微へのこだわり）の例なのか、それとも多少手を加えても美的に表現すること（文化の独自性、誇張への寛容さ）を重んじる周の、——あるいは中国人——一般との——違い、と受け止めるべきなのか。両者の見方のちがいが、日中双方の深いところの、文化の違いに根ざしているように思われ、興味深い挿話である。

ちなみに当時、医学の教科書は高価であり、学生が購入できるものではなかった。教室で教師が口述し、板書したものを書き写すノートがもっとも重要な教材であった。教師たちも数色のチョークを使い、各種の器官図をていねいに画いて見せた。

周にとっていま一つ決定的な事件があった。仙台にきた年にすでに日露戦争（1904～5）が勃発し、日本中が興奮のつぼと化した。「幻灯事件」はこうした雰囲気の中で起きた。幻灯の映写は、今日でいえば、テレビ・ニュースのようなもので、外国製の最新式の幻灯機をつかい、講義前後のあいた時間によく映写会が催された。ある時日本兵に捕らえられた中国人が、ロシアのためにスパイを働いたかどで、処刑されるシーンが映された。見物している群衆の中には、中国人もおり、他の群衆と一緒にあって同胞の処刑を事もなげに見物している。教室内の学生たちは「万歳！」と叫び、盛んに拍手した。周は大きな衝撃をうけた。

「…私にとっては、この歓声は、特別に耳を刺した。その後、中国に帰ってからも、犯人の銃殺をのんきに見物している人々を見たが、彼らはきまって、酒に酔ったように喝采する——嗚呼、もはや言うべき言葉はない。だが、このとき、この場所において、私の考えは変わったのだ。」（「藤野先生」）

どのように変わったのか。精神と魂を深く病んでいる同胞は、医学で救っても意味がない。まず彼らの精神を覚醒し、改革することこそ、緊急にやらねばならない事ではないのか。自分は医学の勉強はやめて、文学運動にたずさわろう、と。

周は学期末に藤野先生を訪ねて、医学の勉強をやめ、仙台からも去るつもりであることを告げた。ただ、先生があまりにも落胆した様子だったので、彼は今後生物学をやるつもりなので、教えてくださいと解剖学も役に立つと思う、と気休めの嘘をついた。

「…出発の二三日前、彼は私を自宅に呼んで、写真を一枚くれた。裏には「惜別」の二字と彼のサインが書かれていた。そして、私の写真もくれるようにと希望した。あいにく私は、その時写真をとったのがなかった。彼は、後日写したら送るように、また、時おり便りを書いて以後の状況を知らせるように、としきりに懇望した。…」（「藤野先生」）

仙台を去って後、周はいろいろな事情から藤野に一枚の写真も送らず、一通の手紙も出さずじまった。

「だが、なぜか知らぬが、私は今でもよく彼のことを思い出す。私が自分の師と仰ぐ人のな

かで、彼はもっとも私を感激させ、私を励ましてくれたひとりである。よく私はこう考える。彼のわたしに対する熱心な希望と、倦まぬ教訓とは、小にしては中国のためであり、中国に新しい医学の生まれることを希望することである。大にしては学術のためであり、新しい医学の中国へ伝わることを希望することである。彼の性格は、私の眼中において、また心裡において、偉大である。彼の姓名を知る人は少ないかも知れないが。

彼が手を入れてくれたノートを、私は三冊の厚い本に綴じ、永久の記念にするつもりで大切にしまっておいた。不幸にして七年前、引っ越しのときに、あいにくこのノートを「紛失してしまった。」<sup>15)</sup> …ただ彼の写真だけは、今なお北京のわが寓居の東の壁に、机に面してかけてある。夜ごと、仕事に倦んでなまけたくなるとき、仰いで燈火のなかに、彼の黒い、痩せた、今にもほそほそした口調で語り出しそうな顔を眺めやると、たちまちまた私は良心を発し、かつ勇気を加えられる。…」(「藤野先生」)

## 2. 医学から文学へ：惜別

魯迅の「藤野先生」も太宰の『惜別』(太宰は魯迅の上記の文章を引用して、この作品を締めくくっている)も以上のようなインプレッシヴな効果をもった文章で終わる。見事な完結であり、文学作品としては、これ以上につけ加えるものはない。ただ、主人公、魯迅と、とくに藤野とがその後どのような生涯を送ったのかは、これらの作品では当然のことながら述べられていない。だが、二人の運命がその後どうなったのかは、(専門家の間では周知であるにせよ)、誰しも関心のあるところではなかろうか。完成度の高い作品に余計な説明を加えることは、無粋な愚行であろう。しかし研究者と普通の読者との間の知識の溝を埋めるために、以下で、あえてそのような愚行を試みることにしよう。

まず、藤野巖九郎は、なぜ1915(大正4)年仙台医専を辞め、郷里に帰る決意をしたのだろうか。「惜別」からわずか9年後のことである。ここで彼の生い立ちとキャリアーについても触れる必要がある<sup>16)</sup>。

巖九郎は、父・昇八郎、母・ちくを、の三男として、明治7(1874)年、敦賀県(現福井県)坂井郡下番村(現あわら市<sup>しもばん</sup>下番)に生まれた。藤野家は、江戸初期から代々続く、医者の家系であった。巖九郎の祖父勤所は蘭学者宇田川玄真に学び、父昇八郎は大坂の適塾で緒方洪庵に蘭学と医学とを学んだ。福井藩から御典医として召し抱えるとの申し出があったが、それを断り、あえて本荘村で村民の医者として暮らすという道をえらんだという。

小学生のころ、巖九郎は元福井藩士の野坂源三郎に漢籍、習字などを習う。あとでも触れるが、このことは中国人に接する藤野の態度に大きな影響を及ぼした。地元の小学校、福井県尋常中学校(現・藤島高校)を卒業後、愛知県立愛知医学校(名古屋大学医学部の前身)に進んだ。父と長兄を早くして失い、次兄に負担をかけたくないので、彼はできるだけ早く医師になる進路を選んだ。1896(明治29)年、愛知医学校を卒業し、同校助手および愛知病院診察医補助となった。明治30年医術開業免許状を取得、愛知医学校教諭となる。同年、解剖学講習のため1年間東京帝国大学へ

出張を命じられた。

1901（明治34）年10月、藤野は仙台医専に講師として招聘された。ときに27歳。3年後に同校の教授に昇進し、9月から最初の解剖学の講義を開講した（この時周樹人と初めて出会う）。明治45年、東北帝国大学医学専門学校の教授となる。ここまではとくに問題はないが、その3年後の1915（大正4）年6月、突然、「依願免官」となる。なぜなのだろうか？

翌年には東京の三井慈善病院（現三井記念病院）において耳鼻咽喉科の講習を受け、同年末まで同病院耳鼻科医員を勤めている。この間、藤野の身の上起きた激変はなぜなのか。

重要な原因は、この間に東北帝国大学医学部の学制上に著しい変化・再編が行われたことと関連している。藤野が従来勤務してきた仙台医専は、明治34年に第二高等学校医学部が分離、独立してできたものである。医専とは、高等学校（旧制）ないし大学予科をへず、中学卒からすぐに専門教育課程に入る学校であり、修業年限も4～5年（普通より大抵1年長い）であった。つまり設置の趣旨からすれば、元来速成の医師養成課程という位置づけといえるだろう。明治政府は、大学医学部レベルの学校設立を二つの帝国大学（東京、京都）以外に、長年、認めてこなかったのである<sup>17)</sup>。

ところで、明治40（1907）年に第三番目の帝国大学として東北帝国大学が設置された。仙台医専はこれにともない45年に同大学の医学専門部となった。だがこれは、医科大学が開設（1915〔大正4〕年）され、さらにそれが同医学部（大正8年）になるまでのいわば経過措置にすぎなかったのである。事実、医学専門部の学生募集は大正4年4月以降停止され、大正7（1918）年には医学専門部は最終的に廃止されている。

北条総長はじめ大学上層部は、当面、医専を土台として利用しながらも、それをそのまま新医科大・医学部に移行させるつもりは全くなかった。「[医専]はどこまでも[医専]であって」、[高等ノ學術技芸ヲ教授スル所]、「…其蓋奥ヲ攻究スル[大学]ではない<sup>18)</sup>、というリジッドというか（大学令の）原則そのままの考え方に立っていた。言いかえると新医科大学は、医専とはまったく別の組織として創られ（スタッフもキャンパスも）、大学令に適合する人材を、内部からではなく、外部（当時としては、外国の大学を別とすれば、東大、京大出身者以外にはありえない）に求め、これを医科大学の中核部分とする。他方、旧医専のスタッフは自動的にシフトさせるのではなく、篩にかけ、適格者のみを採用する、という方針がとられた。その結果、旧医専から移行できた者は16人中たった6人のみであり、残りの10名は、新部局へ移ることができなかった<sup>19)</sup>。医専は数年後廃校になった。きわめて原則的な措置であり、ハードな再編成方式がとられたのである<sup>20)</sup>。藤野はこの「非移行組」に編入され、やがて大学を去らねばならなかった。形式的には「依願免官」とはいえ、実質的には非自発的な退職に近い。このような学制・医療制度の改編は、藤野のような逸材をあたら教壇から退ける結果を招いたのである。いずれにしても、藤野が失意のまま仙台を離れたことは想像にかたくない。

つぎに周樹人がなぜ医学の勉強をやめ、仙台を去ったのかという問題。これについてはさまざまな検討が今日までなされており、いくつかの答えも示されている。簡単にそれらを検討することにしよう。



すでに引用したように、周青年は、同胞処刑の幻灯をみて、決心した。祖国のかかえている問題を解決するためには、医学ではなく、まず民衆の心、精神の問題、社会を根本的に変えなければならない、と。医学よりも緊急に必要なのは、文芸により「国民の精神」を変革することだ、と。

だが「藤野先生」のこの箇所は、あまりにも直截的で、かつ同時にロジカルすぎて若干不自然なものを感じる。そのような指摘は太宰治らによって夙になされてきた<sup>21)</sup>。「幻灯事件」がつよいショックを周に与えたことは事実だろう。だが、それにしても、それで直ちに医学を止め、東京に移るとするのは、いかにも唐突である。もともと周樹人は、文芸に興味を抱いており、それが好きであった。いくつかの習作、翻訳、作品などをすでに執筆していた<sup>22)</sup>。それが彼の心のなかで次第に大きくなり、この事件を契機に専門の転換を直接に促すことになったのではないか——こう見るのがもっとも自然であろう。

彼が当初医学を選んだ理由を大まかにまとめてみると、病弱な父親を長年にわたって看病した経験から旧来の漢方の療法に根本的な疑問をもつようになったこと、さらに中国民族の将来にかんする独特な見方、すなわち逆進化論（劣性な民族性が将来とも持続し、それが強まるという仮説）を人種の改良によって医学的に克服したいと考えたこと、などの要因が指摘されている。これらの問題については、西洋医学を実際に学ぶことによって、そのような誤りや疑念が払拭され、ほぼ納得できた<sup>23)</sup>。いきおい医学を学ぶという最初の動機は弱まってきたものと推測される。

ところで、日中間の学生のレベルについて、周は友人への私信で、次のような興味ある指摘もしている。「…日本人の同級生で、訪ねてくる者がすくなからず、このアーリア人（だと言って民族の優越を誇る人たち）とつき合うのはおっくうなことであります。…この数日間、日本人学生社会の中に入って、ほぼわかりましたところは、思想、行為の点では、中国青年の上には居ないときっぱりと言いきれることであります。ただ、社交の点では活発で、彼ら日本人のほうが長じていると言えましょう。…」<sup>24)</sup>

ここでも日本人の優越感を《アーリア人》と称して、皮肉っている。だが、思想の面ではむしろ中国人の方が勝るとも劣っていないと断言している。他方、しきりに東京での生活を懐かしく思うと書いている。だからと言って、周樹人が仙台で貧乏生活をしていただけではない。普通の日本人学生の仕事が、月平均13円から20円、平均16円であったのに対し、彼の清国官費支給金は年400円であった。日本人の倍近くも受けていたのである。下宿代はたったの8円だった<sup>25)</sup>。

魯迅は、基本的に「シティー・ボーイ」<sup>26)</sup> といつか、都会派だったので、やはり仙台より東京の方が気に入っていたのだろう。のちの上海時代の話だが、彼はターザンの映画が好きであり、ハリウッドものに夢中になったこともある。文芸活動を行うとすれば、東京のほうが断然便利であることは言うまでもない。こうした事情も副次的に作用したかもしれない。魯迅は東京に出てきて、やがてかつて漱石が住んでいた本郷・西片町十番地の家を周作人や友人許壽裳らと共同で借りて住み、「伍舎」と名づけて、ご満悦だったようだ<sup>27)</sup>。

魯迅は、弟の周作人によると、日本滞在中には、日本文学一般にはさほど興味をもたなかったという。鷗外、上田敏、二葉亭などの文体、訳文、批評には注目していたが。ただ、漱石は別格であり、連載中の「虞美人草」を読むために『朝日』を定期購読したほどである<sup>28)</sup>。彼の漱石への傾倒

ぶりがうかがわれる。

魯迅は仙台から東京に転居後、そこで文学研究に専念し、1909（明治42）年夏に帰国した。日本滞在は、結局、7年以上に及んだことになる。

### 3. 「クレイグ先生」と「藤野先生」の比較

ところで、漱石の小品「クレイグ先生」と魯迅の「藤野先生」とが、よく似たところのある作品だという指摘がなされてきた<sup>29)</sup>。最後に、この点について簡単に触れてみたい。

たしかに両者にはつぎのような共通点がみられる。異境において親しく教えを受けた旧師を、後年になって、懐旧しているという筋書きが基本になっている。二人の先生とも服装には無頓着で、いささかむさ苦しいところが似ている。二人とも言葉になまりがあり、方言で話す（藤野先生は福井地方のイントネーションで、クレイグ先生は、つよいアイルランドなまりで<sup>30)</sup>）。性格は、いく分変っているというか、偏屈なところが見られる。にもかかわらず兩人とも独特な、敬愛すべき人柄である。漱石も魯迅も、このような旧師を適度な諧謔味とペーソスを込めながら、つい先ごろの出来事のようにヴィヴィッドに描いている。

漱石は、大学の講義を聴くよりも個人教授について学んだ方がよいと考え、シェークスピア学者のクレイグ先生に個人教授を頼んだ。週1回、先生の自宅でレッスンをうけた。クレイグ（Craig）はアイルランド出身の著名な学者で、シェークスピア字典の執筆に専念するためにウエールスのさる大学を辞め、ロンドンでひとり暮らしをしている。ちなみに謝礼は1回7シリング。

「（クレイグ）先生の白シャツや白襟を着けたのは未だ曾て見た事がない。いつでも縞のフラネルをきて、むくむくした上靴を足に穿いて、その足を暖炉の中へ突き込む位にだして、さうして時々短い膝を敲いて…教えて呉れる。…尤も何を教えて呉れるかは分からない。聞いていると、先生の好きな所へ連れて行ってきて、決して帰してくれない。そうして其の好きな所が、時候の変わり目や、天気都合で色々に変化する。…わるく云えば、まあ出鱈目で、よく評すると文学上の座談をしてくれる……。」（漱石、「クレイグ先生」）

先生の書斎の一隅には、青表紙の「手帳」（大型のファイルと考えてよかろう）が十冊ほど並べられており、この中に書き込みをした紙片を入れておく。

「（これが）沙翁の字典の原稿であり、…先生にとっては大切な宝物である。—これに書き込みでは、…ぼつりぼつりと殖やして行くのを一生の楽しみにしている。…

「日本へ帰って二年程したら、新着の文芸雑誌にクレイグ氏が死んだといふ記事が出た。沙翁の専門学者であることが加えてあった丈である。自分は其の時雑誌を下へ置いて、あの字引はつひに完成されずに、反故になって仕舞ったのかと考へた。」（「クレイグ先生」）

魯迅は、漱石の「クレイグ先生」を中国語に翻訳し（「克莱喀先生」）、弟・周作人編の『日本小説集』に収めて、出版した。魯迅のこの作品に対する高い評価がうかがわれる<sup>31)</sup>。

むろん似ていると言っても、二つの作品には、異なる点も少なくない。同じくユーモラスに旧師を描いているが、漱石の方がより辛辣で、戯画化（カリカチュアライズ）している。ひとつには、家庭教師として「契約関係」であるから、より割り切った接し方をしているためだろう。たとえば、

「(クレグ先生は) 自分の入って来るのを見ると、やあと云って手を出す。握手をしろといふ相図だから、手を握る事は握るが、向こうではかつて握り返した事はない。此方もあまり握り心地が好い訳でもないから、一層廢したら可かろうと思ふのに、矢つ張りやあと云って毛だらけな皺だらけな、さうして例によって消極的な手を出す。」(クレイグ先生)

ある時、文章の添削を頼んだら、クレグは別料金を請求したという。「卑シキ奴ナリ」<sup>32)</sup>と漱石は思った。無償の奉仕を続けた藤野とは全く対照的である。一方が56歳の大家であるのに対し、他方は30代初めの無名で、教育に使命感をもつ教師という違いがある。

さらに漱石がこの作品を書いたのが、1909年であり、8、9年前のことを回顧しているのだが、魯迅の場合には約20年以上も経ってから、20代初めの留学生時代をふり返って書いているのである。漱石が自立した社会人、旧制高校の教授であるのに対し、魯迅はまだ学生の身分であった。リスペクトの度合いが違うのは当然だろうし、時間的間隔の違いも影響していよう。漱石の場合も、学生の時に講義を聴き、以来教えを受けてきたケーベル先生に対する尊敬の念には、より深いものが感じられる。

ところで、平川祐弘氏は、これら二つの作品にみられる類似性から、そこには「創造的模倣」（周作人の用語だという）の作用があったのではないか、その可能性を指摘している<sup>33)</sup>。だが、創造と模倣とは、言うまでもなく形容矛盾である。「模倣」は、コピーという語感が強いので、どのように限定しても、真似というマイナス・イメージがつきまとう。氏が別に用いた「刺激的伝播の心理的作用」の方がよいと思う。あえて言えば、作品「相互間における類似の<sup>インスピレーション</sup>靈感の作用」とでも表現したらどうか。が、これだと全体が締らず、冗漫の誹りをまぬかれないだろう。よりましな用語が求められるべきだろう。

だが、いずれにせよ、これら二つの作品は、ポートレート作品の珠玉の作であり、今日お燦然と輝いていることには変わりがない<sup>34)</sup>。

#### 4. 魯迅の死去と晩年の藤野巖九郎

魯迅はたんに国民的作家というだけでなく、革命的文学の旗手であり、中国を代表する文豪の一人とみなされる存在になった。毛沢東は「魯迅の中国における価値は、わたしの考えでは、第一等の聖人と見なさなければならぬ」と述べ、故人を「聖人化」とするとともに、その政治的利用化を

図ったとされる<sup>35)</sup>。魯迅はその後の藤野先生のことを知らずに、1936年10月に突然亡くなった。享年55歳。葬儀は宋慶齡、毛沢東、内山完造、スメドレーらが葬儀委員となって行われ、彼の死を悼む大勢の人びとが参列したという。

ところで、その1年ほど前、岩波文庫の一冊として『魯迅選集』（佐藤春夫・増田渉訳）が出版された。そのさい編集の方針について魯迅の意向を尋ねた訳者・増田渉に対し、彼は「好きなようにやりなさい。ただ「藤野先生」だけは入れて欲しい。」と述べたという<sup>36)</sup>。無音にすごした藤野に、このような形で自分の消息を伝えなかったのだろうか。一方、藤野は、長男恒弥の中学の国語の教師をとおして『魯迅選集』のことを伝え聞き、かつての教え子・周樹人が現代中国屈指の作家として大成したことを初めて知って、大変喜んだという。翌年、魯迅の急死が日本でも報じられると、作家の貴司山治は地元の新聞記者らとともに藤野宅をおとずれ、そのことを伝えた。そのとき藤野が述べた感想を取りまとめたものが記事「謹んで周樹人様を憶う」として『文学案内』（昭和12年3月）に掲載された。

「……私の写真を、お部屋にかかげておいてくれたそうですが、まことに嬉しいことです。／＼しかし、…その写真を、いつ、どこで、どんなふうにし上げたのもよくは覚えておりません。…周さんに私がしてあげた、…ちょっとした親切を、ありがたいと感じられて、このため私を小説や、お友達のかたがたに、恩師として語っていて呉れたんでしたら、それをよく読んでおけばよかったですね。…死ぬまで私の消息を知りたがっていたのでしたら、音信をすればどんなに喜んでくれたでしょうに…残念なことでした。」<sup>37)</sup>

また別の機会に、藤野は次のように述べている。

「私は幼少のころ…野坂〔源三郎〕という先生に漢学を教えて貰いましたので、シナの聖賢を尊敬すると同時に、かの国の人人を大事にしななければならないという気持ちがありました。周さんが悪人であろうと、はたまた君子であろうと、そんなことには頓着なく、…下宿の斡旋、日本語の話し方まで、…便宜を計ってあげたのは事実です。」<sup>38)</sup>

さて、仙台を去ったのち、藤野は前述のように、東京で約1年間耳鼻咽喉科の講習と実習を受けた（1916〔大正5〕年）。その後、帰郷したのだが、いずれにせよ四十を過ぎて基礎の解剖学から、専門科の転換、開業医としての再訓練はかなりきつかったにちがいない。なお彼は同年りか夫人を失っている。

こういうエピソードが残されている。開業間もないころ、看護婦が、腹痛の患者を診察室に入ると、藤野にひどく怒られた。「わしは耳鼻咽喉科だ！」と、診察を拒んだという。「偏屈な先生やなあ…とよく覚えています。」やがて隣村の開業医で同級生の友人に、「医者とはどんな病気でも診てくれ助けてくれるものと信頼されている、その信頼に応えるのが医者者の義務なのだ」と懇々とさとされ、藤野も考え方を見直すようになった、と<sup>39)</sup>。

昭和12(1937)年7月、日中戦争が始まったが、それについて藤野はきわめて批判的であった。「中国は日本に文化を教えてくれた先生だ。こんな戦争は早くやめなければならない」<sup>40)</sup>とあまりにもはっきりと言うので、まわりの者がはらはらした。

藤野は、貧乏な患者から診療代をとらず、また盆、暮れ払いにもってくるまで支払の督促はしなかった。「夏は、浴衣に紺の羽織、カンカン帽、草履で、たてゴザ(農民の農作業用雨具)を着て、冬は毛編みの目無し帽に、ラシヤの鷹のマント、それに下駄」というスタイルで往診に出かける。晩年、藤野は、村民とともに生き、「医は仁術」を地で行くような生活ぶりであった。彼の雅号は「為庶<sup>いしよ</sup>」という。まさしく庶民に尽つくし、庶民のための医師であった。気むずかしく、取つき難いところがあったけれど、村の人たちに心から敬愛された。

敗戦の年(1945年)の8月10日、暑い日の夕刻、藤野は、診療所から知人宅へ向かう途中、急に目まいを起こし、道端にうずくまった。近くの知人宅で、手当てを受けたが、翌朝、永眠した。享年71歳。「老衰」のためという。父親が御典医を固辞し、村民の医者<sup>いしよ</sup>の道を選んだように、彼もまた後半の人生を地域の人びとの医療のために尽くしたのであった。

藤野の人徳は徐々にではあるが、広く知られるようになった。とくに仙台に魯迅の碑が建設されたこと(1961年)もあって、福井でも「藤野巖九郎先生の碑」を作ろうという機運が、貴司山治や地元の有力者たちの間で強まった。こうして発起人の会が発足。そのなかには中野重治、三好達治、竹内好、水上勉、宇野重吉、島田正吾、増田渉、小田切秀雄らの作家、学者、俳優ら藤野に縁のある人たちが名をつらねている。この募金で、「惜別の碑」が作られ、1964年、福井市内を眺望できる足羽山公園<sup>あすわやま</sup>の一隅に設置された。「惜別」の文字は、彼の直筆からとり、台座の「藤野巖九郎碑」は許広平(魯迅夫人)の手になる。

その後、あわら市と紹興市との間に友好市町協約が締結され(1983年)、交互に友好団や少年使節団などの派遣・交流が行われている。とくに魯迅の「藤野先生」が中国で中学の教科書に載り、他方、彼の短編「故郷」が日本でも中学の教科書に載るようになった。こうして魯迅とともに藤野巖九郎の名前は、かの地でも徐々にポピュラーとなっているようだ。藤野と魯迅の心の交流は、人の心を感動させないでは措かない。彼らが蒔いた交流の種は、いまもなお多くの人によって育まれ、受け継がれている<sup>41)</sup>。日中間には、目下、非常に厳しいものがあり、それは危殆にひんしていると言える。しかしながら、こういう時にこそ双方が互いに長期的な視点に立って、それを絶やさぬよう努力すべきであろう。

## 注および参考文献

- 1) 魯迅「藤野先生」、竹内好訳『魯迅作品集』所収、筑摩書房、1953年、による。以降も断りなき限り本書の訳による。この作品は、彼の他の作品と同じように、体験にもとづいてはいるが、あくまで文学作品であり、フィクションである。他の作品の記述と微妙に食い違う処がある。たとえば、同『呐喊 自序』、竹内好訳、(岩波文庫)との差異のように。
- 2) 太宰治『惜別』(新潮文庫による)について。彼は以前からこのテーマを温めていたという。初版の「あとがき」にこうある。「しかし、両者[内閣情報局と文学報国会一引用者]からの話がなくとも、私は、いつかは書いて



みたいと思って、その材料を集め、その構想を久しく案じていた小説である。」(奥野健男・解説、新潮文庫版による。これは太宰の書いた「唯一の国策小説である」(同。))が、日中の友好親善を前提に、広義では当局の意図に即していると言えようが、それに媚びたり、いわんや戦意の向上に努めたりはしていない。むしろ戦争末期によくこの文学性のある、しかも革新的文学者を主人公にした小説が、公刊されたことが不思議である。(印刷の都合で出版されたのは敗戦直後になったが。)

- 3) 以上は、丸山 昇『魯迅 —その文学と革命—』、東洋文庫、平凡社、1965年、8～16ページによる。小論はこの先駆的研究に多くを負っている。以下で本書を「丸山昇、東洋文庫版」と略記する。
- 4) 阿部兼也、『魯迅の仙台時代 —魯迅の日本留学の研究』、東北大学出版会、1999、2006年。
- 5) 柴崎信三『魯迅の日本 漱石のイギリス 「留学の世紀」を生きた人びと』、日本経済新聞社、1999年、王 勇「中国史の中の日本」、([中国の歴史12]『日本にとって中国とは何か』尾形勇ほか編・所収)275ページ、講談社、2005年。
- 6) 中国の文化発展の状態は、日本と比べてどのような水準にあったのか。歴史学の碩学は、大要次のように素描している。——徳川中期になると、日本の学問も発達した。だが、明治維新のころでも、中国の方が若干進んでいたと言える。では、なぜ日本の方が西洋文化の取り入れ、キャッチ・アップに成功したのか?それは日本が小国であって、これまで先進国に追いつこうとする経験を豊富にもっていたからである。それに対し、中国は大きく、既存の力に押し流されて、容易に方向転換できなかつた。さらに、中国の教育普及率の低いこと(文盲率90%以上)が致命的な障害であった。日本は産業革命以降の西欧の革新的文化を取り入れたので、たちまち中国を追い越した。これが明治、大正の時代である。一宮崎市定『東風西雅』、429～32ページ参照、岩波書店、1978年。小島晋治・丸山松幸『中国近現代史』、(岩波新書、1986年)は、中国の地域的不平等性ととも、教育の普及度の低さを指摘している。34ページ。
- 7) 柴崎信三、前掲書、90～105ページ。以下の、清国留学生の動向についても同書を参照。
- 8) 丸山 昇、東洋文庫版、37ページ。
- 9) 宮崎滔天(宮崎隆介・衛藤藩吉校訂)『三十三年の夢』、東洋文庫、平凡社、1962年。
- 10) 小島晋治・丸山松幸、前掲書、82～84ページ、丸山 昇「魯迅とその時代」、魯迅・東北大学留学百周年編集委員会編『東北大学留学百周年 魯迅 と仙台』、所収、23ページ。(以下、本書を『魯迅と仙台』と略記する。)東北大学出版会、2004年。

さらにヴェルサイユ講和会議(1919年)をめぐる、日本帝国主義の山東利権確保、領土侵略の野心が明確になると、それを契機に大規模な中国民衆の反日闘争、「五・四運動」が開始されたが、とくに『新青年』の主張は、それを全国的な運動に波及・展開するうえで大きな役割をはたした。また、留学先については、日本から主にフランスへのシフトが見られ(たとえば周恩来、鄧小平など。「留仏勤工儉学」制度による)、その後は、さらにソヴィエト・ロシアへと向かう。柴崎信三、前掲書、220ページ以下、坂元ひろ子編『世界大戦と国民形成 五四新文化運動：新編原典 中国近代思想史 4巻』、参照。岩波書店、2010年。
- 11) 「狂人日記」ではじめて魯迅というペンネームが使われ、翌年には「<sup>フインチ</sup>孔乙己」が掲載された。これらは、「新文化運動」に呼応して口語で書かれた。竹内好の前掲訳、魯迅『呐喊』の訳注、小島晋平・丸山松幸、前掲書、82～84ページなど参照。
- 12) 丸山 昇、東洋文庫版、49～55ページ。
- 13) この紛争については、丸山昇、東洋文庫版、65～66ページ、柴崎、前掲書、36～40ページによる。
- 14) 半沢正二郎「藤野先生のこと」、『魯迅と仙台』、所収

- 15) 失われたと考えられた「講義ノート」は、親戚筋のものによって無事保管され、現在、北京の魯迅博物館に所蔵されている。そのコピーの一部は、『魯迅と仙台』および「藤野先生と魯迅」刊行委員会編『藤野先生と魯迅一借別百年』、2007年、(以下、『借別百年』と略記する。)にも収録されている。
- 16) 以下の、藤野の履歴にかんする部分は、泉 彪之助「福井における藤野巖九郎」、(『借別百年』、所収)、土田誠『医師 藤野巖九郎』、あわら市日中友好協会、2013年、藤野巖九郎先生顕彰会(坪田忠兵衛著)『郷土の藤野巖九郎先生』、1981年、同顕彰会『藤野巖九郎記念館写真集』第1集、1981年などを適宜参照し、ページの表示は、必要と思われる以外には省略した。
- 17) したがって国立でいえば、仙台、千葉、岡山、新潟、金沢、長崎などの医学専門学校が、主としてこの間の医師需要の増加にこたえてきたのである。なお、東北帝国大学の、他帝大との比較した成立事情については、天野郁夫「帝国大学の誕生(二)——東北・九州・北海道」、(『学士学会報』、2014-v所収)に詳しい。天野氏は、戦前における大学拡充の最大の困難は「常に財政難であった」と指摘している。これは全くそのとおりであろう。しかし、他方、政府は、大砲や軍艦の拡充を優先し、国民も畢竟それを支持してきたのである。結果論だが、そういう事情のもとでの「財政難」であった。
- 18) 東北大学『東北大学五十年史』、上、722~3ページ、1960年。こうした考え方は、文部省の基本的な方針であった。同書、107ページ参照。
- 19) 旧医専の専任スタッフは計16名(教授13名、助教授3名、非常勤を除く)だった。うち新医科大学に移れたのは「4名(山形伸芸、熊谷岱藏、加藤豊治郎、山川章太郎)に過ぎなかった、とある。(東北大学『東北大学五十年史』上、710~11、723ページ。1960年)だが、他の箇所では、敷波重治郎、後藤基幸の二教授が助教授に降格のうえ、大学に移ったとある(同書、108ページ)。これを考慮に入れば、10名が職を失ったことになる。(細かく見ると同書の記述には、いくつかの食い違いがみられるが、ここではこれ以上詮索しないことにする。)
- なお、本書には、「設置と同時に発令された人々は…大部分東西両帝大の逸材であった。」(同)とある。言いかえれば、前記4名を除くと、すべて東大、京大出身者から採用したということである。
- なお、本書、139ページに「藤野巖九郎が郷里の金沢医学専門学校へ帰った」とあるが、これは誤りである。彼は郷里に近い金沢医専に就職することを希望したが、希望は叶わなかった。結局、故郷で開業医として、家業を継ぐことになったのである(後述)。なお、1918年、つまり帰郷して数年後、北京医科大学から彼を教授として招聘したい旨の申し出があったが、辞退した。前掲『郷土の藤野巖九郎先生』。
- 20) このようなハードな方針に対して医専のスタッフの間に不満が起り、学生とも呼応しながら、一斉に辞表を提出し、休校、つまり一種のストライキを執行しようとする動きが表面化した。1913(大正2)年の春の頃であった。これに対し沢柳総長は、一斉休校の挙にでたものは、懲戒免官の処分に処すると恫喝ながら、他方で平靜にことを運ぶ者には、他専門学校へ転任できるよう努力すると述べ、事態の収拾を図った。辞表の一括提出は行われなかった。前掲、『東北大学五十年史』、上、108ページ。
- 21) 太宰治、前掲書、257-8ページ。丸山昇、東洋文庫版、59ページ以下など。
- 22) ちなみに周は、すでにT.ハックスリーの『天演論』[訳述]に傾倒し、来日してからもジュエヴェルヌのSF小説『月界旅行』、『地底旅行』などを翻訳し、出版している。つまり文筆家へ転換する素地はすでにあっただと言えよう。
- 23) 阿部兼也、「医学から文学へ」、『魯迅と仙台』、所収。
- 24) 「魯迅仙台書簡」阿部兼也訳、阿部兼也、前掲論文、『魯迅と仙台』所収、77ページ。

- 25) 渡辺 襄「魯迅の仙台時代」、『魯迅と仙台』所収。
- 26) 藤井省三、『魯迅 一東アジアを生きる文学』、岩波新書、2011年、周海嬰『わが父魯迅』、岸田・瀬川・樋口訳、集英社、2003年など。なお、この息子による伝記がいまだに魯迅の死因について「日本人医師暗殺説」という謬見に固執しているのは、まことに遺憾に思う。
- 27) 阿部兼也「医学から文学へ」、『魯迅と仙台』、89ページ。柴崎信三、前掲書、151ページ以下。
- 28) 以上は、平川祐弘『夏目漱石 非西洋の苦闘』、126ページによる。新潮社。1976年。
- 29) 平川祐弘、前掲書、126ページ以下。なお、「クレイグ先生」については、畏友鈴木善三氏のご教示をえた。「クレイグ先生」、「ケーベル先生」、『漱石文学全集』10巻所収、集英社、1983。
- 30) 葛谷 登「藤野先生」と藤野巖九郎(一)、(二)、(三)、(『愛知大学 文学論叢』所収)はCraigの家系や生い立ち、および藤野巖九郎の話し方などについて詳しい。
- 31) 平川祐弘、前掲書、127ページ。
- 32) 夏目漱石、『漱石全集』、第13巻、日記および断片、1901年2月付き、「Craigニ至ル文章ヲ添削セン事ヲ依頼ス Extra chargeヲ望ム 卑シキ奴ナリ。」とある。39ページ、岩波書店、1966年。
- 33) 平川祐弘、前掲書、124ページ以下。
- 34) なお、藤井省三氏によれば、漱石と魯迅の文学には、ともにロシアの作家アンドレーエフを媒介として、通底するものがあるという。すなわち、近代化にともなう諸問題を、先進諸国の文化を受容しつつも、自国の個性・アイデンティティーをふまえた独自の方法、観点に基づいて表現しようと苦闘した作家として位置付けられる。このように、二人の作家についての「神話」、ステレオタイプ化した解釈を剔抉しようとする同氏の分析と見解は、非常にユニークである。藤井省三『ロシアの影 夏目漱石と魯迅』、平凡社、1985。
- 35) 藤井省三、前掲、『魯迅』岩波新書、209ページ。強調は引用者。筆者の、中国知日派の友人は、「魯迅は今ではあまりにも有名になりすぎました。」と語ったことがある。「聖人化」されるのを誰よりも嫌っているのは、他ならぬ魯迅自身ではあるまいか。
- 36) 泉 彪之助、「福井における藤野巖九郎」、『惜別百年』、32ページ。
- 37) 半沢正二郎、前掲論文、『魯迅と仙台』所収。
- 38) 半沢正二郎、同上、『魯迅と仙台』所収。
- 39) 土田誠『医師 藤野巖九郎』、その他、以下の資料をも適宜参照。泉彪之助「福井における藤野巖九郎」、前掲、『惜別百年』所収、福井県芦原町／芦原町教育委員会「魯迅と藤野巖九郎」、2003年。
- 40) 泉彪之助、前掲、『惜別百年』、32ページ。
- 41) 最近の藤野巖九郎記念館の訪問者数は、次のとおり。  
2011年：882名(うち中国人：83名)、2012年：1702名(中国人：257名)、2013年：1517名(中国人：189名)  
(藤野巖九郎記念館の提供による)

〈付 記〉 本稿では、スペースの関係と筆者の非力のため、帰国後の魯迅の活動については、ほとんど触れることができなかった。その点をお断りしておきたい。